

穂首の形状の悪さをいう語に、次の語がある。

スク(透く) 二の毛や腰の毛など、一番下の毛の入れ方が少ない形

オチル(落ちる) 穂首の途中の、真中あたりが急にくぼんでいる形で、三の毛以下の毛の量が少ないもの。

なお、「スク」「オチル」と評される形の穂首は、「ダ」(段)、「フシ」(節)がついたように見えるといわれる。このような筆は、筆司の説明によると、墨をいっぱい含んでいる時は書けるが、墨が乏しくなると書けなくなる。これを、筆司は「ワレル ワケ ヨノ」。(穂首が割れるわけよね。)のように、説明する。

ツカエル(支える) 穂首の途中が急にふくらんでいる形で、下の毛が多すぎるもの。

以上のように、評価語は、筆の穂首としての不適正さの角度からのみ命名されている。そして、それが、いずれも、動詞形で表現されていることに、筆司という作業者の操作概念として、毛筆評価がなされているということを取取できる。

## 第五節 熊野町方言の特色

熊野町の方言は、広島県下の安芸方言の特色を、強く示している。そのことは、音声、表現の生活のいづれにもよく見うけられる通りである。また同時に、安芸南部地域の方言の特色をもっていることも言うまでもないことである。たとえば、三八ページの例のように、熊野町には、「ノイヤ」文末詞が用いられている。このことは、広島県沿岸部島嶼部に見られる状況と一致するところである。そのほか、「アブラ」(油)のアクセントや人称接尾辞「〜チャン」の使用など、多くの安芸南部地域に分布する事象との一致を指摘できる。

広島県南部の特色を有しているとはいいながら、特に注目される事象が、熊野町方言のうちに認められる。それは、接統助詞「〜チ」、敬語助動詞「〜ンヤル」、禁止の慣用句「ワカラン」などである。これらは、安芸南部地域の中でも、当町できわだってよく用いられているものである。これらの事象が周辺の地域とは異なっており、今日においても熊野町できわだつて盛んであるのであろうか。それは、一つには、熊野町が、かつての大交通路であった山陽道から外れていること、また一つには瀬戸内海交通の要港からも外れていることを指摘できよう。そうは言っても、山陽道からそれほど大きく離れている地域ではない。しかしながら、当熊野町は、盆地である。そのうえ、周辺の交通路からは登り坂の上にある高地に位置する盆地であったことに注目しなければならぬ。これらのことが、人の交流をはばむ要因になり、当町方言に、どちらかといえば、方言上の古態を多く残存させてきたと考えられる。また同時に、山中の盆地であることが、町独自の生業である毛筆業を盛んにさせ、他町には認められない特色ある生業語詞群を保有させることになってきたのである。

昭和四十年ごろから、熊野町内に県営団地が造成されたのに伴って、多くの団地が造成されるに至っている。町内には、広島市などからの人口移入が大きくなりつつある。それに伴って、熊野町のことばの生活は、急速に広島市方言の影響を受けつつある。そのことは、親族名称や呼称の変化、あるいは屋号の喪失という状況に認められるようになっているとともに、発音、表現の生活にも、見られるようになっていっている。その意味では、熊野町方言は、遠からず、広島市圏域方言のうちに包括されてしまうように見受けられる。このことは、熊野町という、都市近郊の地域社会の方言変化の動向をよく示しているといつてよからう。